

遙望、顧東而勅侍臣曰、海即青波浩行陸是丹霞空濛國在其中、朕目所見者、時人由是謂之霞郷。

やけ

〔倭訓栞前編三十四〕やけ 全浙兵制に霞を譯せり、今も日やけなどいへり。

〔日本風土記天文〕霞下吉 やけ

〔改正月令博物筌三春〕霞あかとは詩に、東の方赤くしてきなり、本朝俗にいふ朝やけ、夕やけの事也、日の

面にあかきは、二三日の内に雨ふるなり、

〔改正月令博物筌三秋〕秋霞あかづいて日和よし、朝あけ天雲のやけるを朝やけとす、こしくやければ、陽氣のさかんなるなり、雨

きて日和よし、霞の事、春の十六丁めに委し。

〔梅園日記〕朝あけ 七玉集に、家良山のはもかすむと見ゆる朝あけにやがてふりぬる春雨の

空、按ずるに、朝あけのあけはあかきをいふ、今いふ朝やけなり、あの聲のやのごとく聞ゆるは、歌

合、根合などのたぐひ也、又新撰六帖に、衣笠内大臣山のはにほてりせる夜はむろの浦にあすは

日よりと出る船人、とよみ給へるは、夕あけにや、されば朝あけは雨、夕あけは日よりと、ふるくよ

りいへる諺なるべし、唐國にても、范成大石湖居士詩集の題に、曉發飛鳥晨霞滿天、少頃大雨、吳諺

云、朝霞不出門、暮霞行千里、驗之信然、升菴集に、素問云、按素問六、元正紀霞擁朝陽、雲奔雨府、楚辭

云、紅蜺紛其朝霞、夕淫淫而淋雨、唐詩云、朝霞晴作雨、俗諺云、朝霞不出市、升菴外集に、儲光羲詩、落

日燒霧明、農夫知雨止、歌緯詩、向月微月在、報雨早霞生、中また朝やけ夕やけともいふべくや、中

略上に引る衣笠大臣の御歌、山のはにほてりせる夜とよませ給ひしは、夕あけにはあらぬにや、

さらば田家五行に、日沒返照主晴、俗名日返塢と、是なるべし。